

ふくしま復興を考える県民シンポジウム

○オープニングメッセージ 『ふくしま復興の光と影』

福島県知事 内堀雅雄

【概要】

- ・ 原発事故により、宮城・岩手とは違った難しさがある。逆に私達がどう動いていくかがポイント。
- ・ 健康管理、農業や観光の風評対策にしっかり取り組むことはもとより、原子力に依存しない社会を目指し、再生可能エネルギー導入を推進、さらにはロボット産業革命の地を目指して取り組む。
- ・ 不可能の反対語は可能ではない。チャレンジだ。



○特別講演 『原子力災害と向き合う：福島復興と災害への備え』

国際赤十字・赤新月社連盟

事務次長 ウォルター・コッテ氏

【概要】

- ・ 復興に向けた解決策を見つけ、世界で最も美しい福島を取り戻さなければならない。



原子力災害対策上級担当官 マーティン・クロットマイヤー氏

【概要】

- ・ 被害者心理を乗り越える必要がある。
- ・ 支援はあるべきだが、妨げになる可能性もある。
- ・ コミュニティの向上が必要。
- ・ 福島が災害を乗り越えてレジリエンス（災害に強い）のシンボルとなり、忘れられることのないように国際ネットワークを駆使して情報発信に取り組む。



○記者からの情勢報告

福島テレビ（株）アナウンス担当部長 浜中順子氏

【概要】

- ・子ども達にふるさとの記憶をしっかりと持ってもらいたい。子ども達からふるさとの記憶を奪ってはいけない。この福島はとても素敵で自慢の出来る福島だと自信を持って言えるようにしたい。
- ・「テレビを聞いています。こんなに大変な時期ですが、福島の実、福島の今を伝えてください」と言われた。一つ一つの取材の現場で出会うことが、一つ一つの積み重ねとなって伝わっていく。
- ・私たちアナウンサーとして「あのね」って話しかけてもらえる存在でありたい。



~~~~パネルディスカッション~~~~

○東北大学大学院工学研究科教授 堀切川一男氏

- ・福島県地域産業復興支援アドバイザーとして新製品開発の秘訣・コツを講演。
- ・ニーズは社会から。必ずしもハイテクでなくて良い。必要とされる商品であれば良いと中小企業の方には言っている。
- ・中小企業の復興支援。徐々に学生自ら「自分にやらせてくれ」という意識に変わってきている。復興支援に携われる喜びを感じている。小さな成功事例を生み出し、結果に責任を持つこと。
- ・震災前に戻すという復興は無理。気付いたら震災前よりも良くなっていることを目指す。
- ・「福島ドリーム」の実現を提唱したい。



○（株）アイザック専務執行役員 久米康歳氏

- ・車いすは前から座るという固定観念を、真逆の発想で後ろから乗り込む新しいコンセプトの移動用ロボットを開発。
- ・福島は優秀な加工業者を抱えている。会津大学は単科大学として世界一の学生数。ITベンチャーも世界有数。ロボットを作れる土地だ。
- ・部品の9割を県内で調達することにこだわる。若い技術者が元気になってくる。
- ・ロボットは課題が山積。地元の会社と解決していく。



○会津若松商工会議所青年部 大塩真理氏

- ・会津発祥のジュニアエコノミーカレッジに取り組んでいる。子ども達の自分力を引き出す。
- ・「風評」に責任を押しつけず、(自分力で)自分の足で立っていくこと。そのためには、次世代の育成が必要。
- ・ジュニアエコノミーカレッジで子ども達の顔つきが変わる。がんばりを大人が認めることで自信につながる。
- ・厳しい現実が続くが、大人達の思いを受けた子ども達が日本中に増えれば、日本の地域は豊かになる。



○小高ワーカーズベース代表 和田智行氏

- ・浜通りは世界から注目されている。多くの支援者、企業、研究者がいるのでチャンスと捉えたい。
- ・避難区域は人が住むには課題だらけ。ビジネスが生まれる元となるのが、課題やニーズ。
- ・発信の仕方も重要。小高はゼロから町を作っていくことができると東京でアピールしたら多くの若い人が小高に行きたいと応募してきた。
- ・行政主導だと住民感情を逆なですることがある。まずは民間が突破口を開いて、そのあとから行政がバックアップするのが良い。
- ・やりたいことが生業としてできる場所になる。そういった機運が福島全体に広がれば人は集まる。



○日本工機（株）白河製造所品質保証部長 藤垣雄一氏

- ・はやぶさのインパクターを担当。夢を追うパワーと使命感がもたらしたもの。
- ・ピンチはチャンス。企業の力になるし、技術者のレベルアップになる。
- ・科学に関する出前講座など、次世代の育成に協力したい。
- ・はやぶさ2プロジェクトで若い技術者のポテンシャルが上がった。小学生にいかにか希望を持たせるか。サイエンスのおもしろさを伝えたい。
- ・2020年にははやぶさ2が帰ってくる。それまでに復興を進めれば、オリンピックと合わせて3重の喜びになる。



○福島大学行政政策学類准教授 丹波史紀氏

- ・多くの方々が生活を再建するのに大きな課題を抱えていることを忘れてはならない。
- ・福島県民の一員として、地域で役割を發揮できるようにする取組が大事。
- ・課題先進地域と言われる福島から、取組を進めることがチャンスにもチャレンジにもつながる。
- ・産業、仕事づくりは重要だが、それを支える人材づくりが課題。福島県の担い手の6～7割は県外に出て行く。
- ・小高の子どもが「原発で働くことが夢だったが、働くことができなくなった」と言った。子ども達にいろいろなチャンスをつくる必要がある。
- ・地域の資源を再発見すること。外部の目で見ること。無い物ねだりではなく、あるもの探しだ。
- ・交流人口を増やすという従来の考え方はあるが、これからは「関心人口」を増やすこと。福島のファンを増やすことだ。



○福島県知事 内堀雅雄

- ・福島が抱えるジレンマ。風評と風化の矛盾・ジレンマ、中間貯蔵のジレンマ、抱えながらも一步一步乗り越えなければならない。
- ・アクションすることが大事。動くとお会いがある。
- ・福島出身であることを堂々と言えるか。若い方の取組にかかっている。
- ・目がキラキラしている人が増えてきたと感じる。



○日本放送協会解説副委員長 城本勝氏

- ・ふたば未来学園高校も開校する。子どもたちの未来が素晴らしいものであるようにしなければならない。未来は子ども達のためにある。我々も、皆さんも頑張ってくださいませ。



○クロージング 福島大学学長 中井勝己氏

- ・人それぞれ、学生それぞれの復興への関わり方があって良い。福島に残るも良し、一度福島を出て外から関わるも良し。
- ・明日の福島を担う人材の育成が重要。長いスパンで福島の復興を見ていくことだ。
- ・自分のふるさととして戻りたくなるような復興を目指さなければならない。

